〈研究論文〉

歴史社会学者としての宮崎市定

－ 東洋史からアジア史そして世界史へ －

吉野　浩司*

Ⅰ．はじめに

現在、日本では世界史が流行している。思い当たる理由の一つは、自国の歴史、ないしは一国の国民国家の歴史を、いったん世界史のなかにおいて相対化する必要に迫られていることである。二つめに、そもそも世界史それ自体を根底から見直す時期にきているのではないか、という疑問が抱かれるようになったことがあげられよう。

こうした問題を考えるさいには、日本よりもむしろ大陸国である中国の歴史に範を取ることのほうが好都合のように思われる。だがそれは、中国の悠久の歴史に学ぼうという、素朴な考えからではない。逆説的に響くかもしれないが、中国史というものは本来的に書くことができない、という事実によってである。それはどういうことか。中国史を眺めてみるとわかるように、その歴史は漢民族のみが作ってきたわけではない。それどころか遼、金、元、清などの征服王朝や、異民族による侵略の歴史のほうが長いといってもいいぐらいである。だとすると、中国はナショナル・ヒストリーというものが、本来的に書けないような成り立ちをしている、ということになるだろう。だがその反面、辺境の異民族からの影響と脅威にさらされてきたおかげで、中国は絶えず国をまとめあげるための強固な中華思想を鍛えあげてきた、ということも事実である。「清朝までの中国は、外国との国境がなかったという説」さえある[1)]。本来であれば、一国の歴史が書けない中国だからこそ、あれほど熱心に史書というものが書き継がれてきたという逆説は、この点において成り立っているのである。

本稿で俎上に載せたいのは、宮崎市定（1901年～1995年）[2)]が書いた、中国ならびにアジアの通史である。上記のような特徴をもつ中国の歴史であるからには、決してシナ学という、対象をあくまでも中国に絞りこんでいこうとする立場から、歴史を書くことはできない。そこで彼は、中国を中心としながらも、そこからはるかに遠くを見はるかそうとする、東洋史ひいては世界史の立場から書こうとした。視野の広さばかりではない。概論ないし通史を書きあげることが、歴史家の使命であるとわきまえていた宮崎は、その生涯において３度にわたり通史をものしている。つまり宮崎は、地理的広がりのみならず、時間的な広がりへの目配りをも怠ることがなかったのである。

初々しい一作目にあたる『東洋における素朴主義の民族と文明主義の社会』（1940年刊）は、北方の遊牧民族と南方の農耕民族の対立によ

*韓国又松大学グローバル文化ビジネス学部専任教員

り、中国を中心とする東洋史を描き出そうとした労作である。これは、東洋史を素朴主義と文明主義という対立概念によって捉え返そうとしたところに、新鮮味が感じられよう[3]。しかしどうしたわけか、そうした対立概念による分析は、数年後に書かれた『アジア史概説』（1947-1948年刊、増補版1973年刊）では、差し控えられているような印象を受ける。その代わりに前面に押し出されているのが、「交通史観ないし交渉史観」とでも呼びうるものである。それは「歴史の見方とナショナリズムへの積極的評価という観点に立脚してアジア史が構想」[4]されたものである。アジア全体を網羅すべく、そこには西アジアもインドも含まれていた。それが最後の『中国史』（1977-1978年刊）になると、今度は打って変って、対象とする範囲が一気に絞りこまれているところに目を引かれるものがある。しかも、かなりの紙数を割いて説かれているのが、冒頭の時代区分論であるし、また新しく導入された景気変動史観[5]も、本書を読解するさいに読み落とすことの許されない、重要な着眼点であろう。

このような宮崎による通史の書き換えの足取りをたどってみるにつけ、そこには、現在の世界史ブームが投げかけている冒頭の問題に、解決の糸口を与えてくれるのではないか、との期待が自然と膨らむ。繰り返しになるがその問題とは、閉鎖的な国民国家の歴史すなわちナショナル・ヒストリーを超えることであり、他方では偏った世界史の見方を再検討することである。そうした問題に対し、宮崎はどのような答えを用意したのか。そのことを彼の通史三部作に焦点を絞って明らかにしようとするのが、本稿の課題である。

宮崎は、さまざまな分析手法を駆使しながら、アジアの歴史研究に切りこみ、ひいては世界史の構造的な把握をめざした。そうしたことから本稿では、宮崎を東洋史学者ではなく、あえて歴史社会学者であったと銘打っておきたい。

Ⅱ．素朴主義と文明主義の東洋史

宮崎には、大学に入学する以前から思いを潜めていた課題があった。それは「塞外民族と支那」[6]である。塞外とは、いわゆる万里の長城の外側のことを指している。この研究に先鞭を付けたのは、白鳥庫吉（1865年～1942年）であった。白鳥は伝記の中で、この研究に手を染めるようになった経緯を、次のように語っている。それによると欧米の研究者は、「満州と朝鮮の研究には手をつけてゐなかつた」。「欧米人の出来ない満州、朝鮮の歴史地理の研究を我々日本人の手に依り完成しなければならないと思つた」[7]と。アジア研究においてさえ先を越されていた欧米人に対し一矢報いたい、というのが白鳥の塞外研究の原動力であった。

しかし宮崎の場合は、それよりも研究対象に即した、もっと切実な執筆の動機があった[8]。その動機は、『東洋における素朴主義の民族と文明主義の社会』という表題からもうかがえよう。この通史の第一作目は、歴史というものが素朴で野卑な辺境の民族と、洗練された中央の文明との角逐によって作り上げられるものだ、という宮崎もちまえの世界観によって貫かれているのだ[9]。ある世界観に裏打ちさた分析手法でもって対象に切りこんでいくという意味で、東洋史家の宮崎の研究方法は、あるいは歴史社会学に近づいているといえるのではないだろうか。もちろんそこには実証的な歴史学に相応しい、新しい知見が含まれていなかったというわけではない。中国文明発祥の地が、山東省南端

にある解州産の塩の消費地と密接に関係していること、それから春秋時代に、ギリシャのポリスのような城郭都市があったことなど、これらは歴史学の立場から、見事に論証されている[10]。しかし実際、本書の冒頭からして明らかなように、一方では文明主義の漢民族を基軸とする東アジア史を描きながらも、他方では、その漢民族を常に脅かし続ける周辺民族がおり、その民族は例外なく素朴主義の気質の持ち主であったことを、立言しないではいられなかった。

素朴主義とは何か、まずはこの用語から明らかにしておかなければなるまい。概念的な説明は後回しにして、チンギス・ハーン（1162年頃～1227年頃）を具体例としてあげておくことが理解の助けとなろう。一代でモンゴル帝国を築きあげたチンギス・ハーンは、幼少期にあろうことか弟を殺害している。驚くべきは、その理由というのが、単なる魚の取り合いだったという事実である。もう一つ、人生の楽しみを問われた彼は、人々の泣き叫ぶなか、婦女や財宝を強奪することだ、と言下に答えたと伝えられている。これらの事実を、ただちに未開民族にありがちな蛮行だと決めつけてしまうのは、いささか短絡的であろう。宮崎によるなら、この極端な逸話は、むしろ次のように解されなければなるまい。「文明人が煩悶を理智的に解決せんとすれば、素朴人は意志的にこれを克服する」ものである。文明人は理知的に思索もすれば、情緒纏綿的でもあり、さらには女性的で、個人と自由を尊重するものでもある。それに対して素朴人は、意思的に行動し、直裁簡明、男性的でもあり、また全体統制主義を信奉するものである。つまり、「文明人に文明主義の教養あれば、素朴人には素朴主義の訓練がある」[11]、ということを肝に銘じておかなければならない。洗練された文明主義が歴史を書こうとするのに対して、野蛮な素朴主義の民族は歴史を造っているのではないか。そういう世界観が、この初期の通史の根底にある発想なのである。

素朴主義について、いましばらく宮崎の主張に耳をかたむけておこう。人類の進歩の原因は、「不満感」である。そう見抜いた宮崎は、不満の多くは、第一に野蛮が文明に対して、第二に貧者が富者に対して、第三に年少者が年長者に対して抱くものに分けることができるとした。この不満感については、どうやってこれを解消するのかについても、併せて考えておかなければならない。野蛮人や貧者、あるいは年少者は、文明人や富者や年長者に出会うと、いったんは不満を抱いたとしても、自らを反省し、速やかに従おうとする一面をもつ。もちろん、逆のことも想像できよう。文明人や富者、ならびに年長者がもたらす腐敗や悪習への抵抗が生まれてくる場合もあるからである。歴史においては、そうした不満感の解消方法いかんによって、他を圧倒することもあれば、自らの衰退を招くこともある。

「一度一つの社会に入りて安住すればそこに行わるる幾多の陋習も、やがては当然の事と考えて意に介せず、一種の不感症に陥る。かかる社会は飽満せる社会であり、発展なく進歩なく、時には堕落しゆく社会である」。だがここにある、新たな社会変革の兆しを見逃してはならない。「文明社会において階級が固定するや、時あってか貧困者の不満感も発露するに術なき場合がある。かかる際には外部における素朴なる野蛮民族の侵入があって、文明社会において麻痺せる不満感が覚醒される」[12]。このように「素朴性」とは、野蛮人が文明化するときに失われるものである。だが同時にそれは、文明をつねに脅かし、緊張感を与えることで文明の発

展を支えているものでもある、というのである。

こうした宮崎の対象の捉え方は、歴史記述的ではなく、やはり社会哲学的ないしは歴史社会学的な分析に近いといわなければなるまい[13]。以下では、素朴主義と文明主義の対立がおりなす歴史的事件の数々を、とりわけ初期の宮崎が力を注いだ古代史の例を中心に取り上げてみるとしよう。

文明は、財の集まるところに栄える。財のはじまりといえば、一つは塩であろう。だが多すぎると、価値を減じてしまうのが、財の特性でもある。必要とされるぐらいに、ほどよく無いのが丁度いい。交易や取引がはじまるからである。古代中国文明の発祥の地をたずねると、ことごとく、そういうところであったことに気づかされる。夏が都したのが安邑、その近くには、塩を産する解州があった。つづく殷は、別名を商といい、文字どおり、商売に通じた人たちの文明であった。その殷の紂王（紀元前1100年ごろ）が酒におぼれて、国を滅ぼす。歴代の華やかな王朝史からすると、大した贅沢でもなかっただろう。だが、次に王朝を作る、未開の周民族からすると、まるで「酒池肉林」であるかのように映ったようである。文明主義と素朴主義の差異は、こうしたものの見方、考え方の違いとなって露呈する。周が殷を攻めた直接の動機は、むろん解州の塩にあった。けれども未開の蛮族であった周は、塩による取引をはじめるにあたっては、交易の才に恵まれた殷の遺民を使わなければならなかった[14]。素朴で野卑な民族は、勇猛さに長けてはいるとしても、交易や統治に必要な、打算や狡知において劣っていたことの、何よりの証拠である。宮崎のいう、文明主義と素朴主義の関係の原初的な一例を、ここに確認することができるであろう。

ここで一つ注意を促しておきたいことがある。それは、この図式が当てはまる範囲に、ある程度の広がりが許されている、ということである。言い換えると、中国国内の統一の動きを理解するだけでなく、統一後の周辺民族との関係をも、説明しうるモデルたりうる、ということである。ここでいう国内統一から異民族排撃までの動きが、古代と呼ばれる時代の趨勢である。すなわち春秋戦国時代における角逐のなかから、秦が生き残り、さらにそれを漢が補強することで古代帝国は完成を見るのである[15]。まずはこの国内の統一までの動きを、宮崎のモデルに依拠して読み解いてみよう。

「春秋時代を通観するに、この時代は周を中心とする中原の文化が周囲の開明の程度低き異民族の間に伝播して、これを啓発した時代である。未開民族が文明化したるとき、外部に向って強大なる圧力を生ずる」[16]。「或る部族はこれを摂取し、或る部族はこれを拒否し、或る部族はこれに沈溺する」。「沈溺する者は自ら滅び、拒否する者は時代に遅れ、ただ摂取する者のみがその指導権を確保して更に他の部族にこれを及ぼ」すことになる。「未開民族の旺盛なる闘争力はその方向を統一されて外部に向って発動するのである」[17]。

「戦国七雄国の中において、最も遅く開けたるは秦である。その未開なりし点が、秦の有する最大の強みであった。その民は野蛮なれども単純にして御し易く生活程度が低ければ攻城野戦の困苦欠乏に耐え得る」。しかし一気呵成に諸国を統一したはずの秦であったが、その滅亡も、驚くほど呆気ないものであった。秦の滅亡の原因は、どこにあったのか。戦国時代よりくすぶりつづけていた、残り六国の反感を、統一平定後も、抑えることができなかったからに他ならない。しかも、より深刻だったのは、中原

の文明の浸透によって、王室や指導階級が腐敗したことである。「文明最も進める国は、最も多くの弱点を有せる国である」。その意味では、「秦の滅亡の最大の原因は、実力の不足と自らの内面的崩壊」であったというほかない[18]。

「戦国時代の秦人は未開野蛮であるが同時に素朴純真であり、戦士として用うるに最も適当した素質を有していた」。他方、中枢で指導的任務に当るものを選ぶ場合、素朴で野卑な自民族からではなく、開明的な異民族出身の人材を登用することに、何の躊躇もない。その英断ぶりは、秦が滅ぼした魏の遺民である衛鞅（＝商鞅、紀元前390年～紀元前338年）を宰相に抜擢し、法家の政治理論を実践したことにも見てとれよう。だが「秦の中央政府」は「六国社会の残骸たる豪族に対して適当なる政策を持ち合わせていなかった」。始皇帝（紀元前259年～紀元前210年）の死後、相次ぐ反乱に対し、力ではなく穏便に慰撫する統治能力にかけては、一段と劣っていた[19]。ここに、秦の政治感覚の欠落、ひいては素朴主義が抱えこんでいる、決定的な弱点を看取することができるだろう。

短命な秦を引き継ぎ、古代帝国を完成させたのは、漢であった。国内が統一されるや、今度は国外の匈奴という新たな野蛮と戦わなければならなくなった。その緊張がある間は、国内の結束は固い。しかし匈奴が衰えるにつれ、次第に漢の王室は「分解作用」をはじめる。漢の場合、奢侈の増加により、外戚と宦官が力をつけた。こうした事態は、儒家や法家の想定の及ぶ範囲ではない。「漢代の政治家には、外戚の取扱いは全く未経験であると共に無定見であった」。そのため、宦官をもって外戚を抑えようとした。これは漢社会の隅々にまで、文明主義が瀰漫したことを暗示させる、稚拙な対処法であった。外戚の王莽（紀元前45年～紀元後23年）は迷信を利用した。迷信といえば野蛮人の悪弊だと連想しがちであるが、むしろ文明の爛熟するところにはびこるものである。王莽は首尾よく漢を滅ぼすことができたが、それは同時に、自らを滅ぼす原因ともなった。さすがに後漢になると、地方の自治を認める代わりに、中央の援助を義務づける、という新しい仕組みを確立することができた。これをもって、「地方豪族の官僚化と同時に貴族化」が進められた、と言い換えることもできよう。やがてこれが、中国の中世という混乱の時代の礎を築く役割を果たすことにもなる[20]。

以上が、宮崎による通史第一作目の、古代中国史に該当する部分である。国内の統一とその後の周辺民族との興亡のように、他の民族との直接の接触がある場合は、文明と素朴という対立概念は、有効な分析道具たりうるといえるだろう。それに対して関係が直接的でない西洋との比較のために宮崎は、対立図式とは別の方法も用意していた。それは、同時代的な現象を、類比という手法で並列、対比させることであった。ここでもやはり、古代の事例を、二つ三つばかり挙げておこう。

「春秋時代の中国は古代ギリシャの状態と殆んど大差なき城郭国家の対立であり、個々の都市国家間の対立意識が極めて旺盛であって、容易に他国、殊に異民族国家の支配の下に立つを肯じない」。あるいは、ダレイオス１世（紀元前558年頃～紀元前486年）がペルシャを統一したのが紀元前518年、アレクサンダー大王（アレクサンドロス３世、前356～前323年）がペルシャを滅ぼし大帝国を作るのが紀元前330年、それに触発されてインドを統一したアショーカ王（紀元前304年～紀元前232年）が領土を最大化するのが紀元前261年、それにつづくのが始皇帝（紀元前259年～紀元前210年）による古代

中国の秦帝国である、とまとめあげるのである[21]。

この東洋から西洋にかけての比較によって、大帝国建設の動きが、西アジアから西はヨーロッパへ、東は中国へと向って移動していることが露わとなる。次章で述べるように、こうした発想がもととなって、宮崎独自の世界史の時代区分年表が作成されたことは間違いない。「歴史は須らく世界史でなければならぬ。事実、私の研究は常に世界史を予想して考察して居り、世界史の体系を離れて孤立して個々の事実を考えたことは一度もない」[22]。これが宮崎の生涯かわらぬ研究姿勢であったといえるだろう。にもかかわらず、『東洋における素朴主義の民族と文明主義の社会』を書きあげた段階ではまだ、その考えを説得的に開示するにはいたらなかったといわなければならない。というのも素朴主義と文明主義の相克という対立図式にこだわるあまり、どうしても「東洋史」という枠組みを抜け出ることができなかったからである。そもそもこの対立図式それ自体が、宮崎のいう古代という時代を超えた時には、あまり説得的ではなくなってしまう。例えば近代日本に関する次のような発言はどうであろうか。「幸いに東洋には一個の素朴主義社会が存在した。それは日本である」。「日本は古き文明を有しつつも、一方において素朴主義を捨てざりしことが世界に向って誇るに足る事実である」[23]。日中戦争開戦後まもなくの時期に、日本を素朴民族に見立て、中国ならびに欧米文明との対立図式を思い描くなどということは、単なる筆のすさびといわれてもしかたがないだろう。こうした限界を踏み超えようとしたのが、次章で論じる『アジア史概説』であった。

Ⅲ．東洋史からアジア史へ

アジア史と東洋史は違う。アジア史を論じる場合には、素朴主義と文明主義の相克という東洋史の方法とは別の方法を見つけなければならない。それが前章で明らかになったことである。その方法とは、いかなるものであろうか。そのことを宮崎の記述に即して論じていくのが、本章の課題である。

宮崎の２冊目の通史『アジア史概説』は、これまでにもさまざまな角度から論じられてきた。その論点は、大きく二つにわけることができよう。まずは本書が、元をただすと大東亜共栄圏の教科書として準備された、という由来に関するものである[24]。次に東西交流史、すなわち「交流」あるいは「交通」という視点から書かれたアジアの歴史である、という中身にかかわるものである。第一の点でいうと、皇国史観の痕跡がどのようなところに現われているのか[25]。あるいは戦時下という時代状況にもかかわらず、科学的な歴史記述をめざそうとした、ということなどが語られている。第二の論者は、アジア各国の歴史を交流史、ないし交渉史として捉えることで、総合的なアジア史を作ることができた、と好意的に評価するものが多い[26]。しかし本稿では、いずれの読み方にも与しない。大東亜共栄圏を擁護するものであったのか、それとも、それをこえるものであったのか。そうした議論を展開することは、あながち不毛というわけではないとしても、テキストを虚心に読み取ろうとするときに、かえって妨げになるからである。もとより本書は政治的なパンフレットの類ではない。純然たる歴史の著作として書かれている。

他方、本書をアジアの交渉史として読み解くことについては、至極当然のことであり、あえ

て異議をさしはさむことはないのかもしれない。しかしその場合でも、本書をアジアの交渉史として読むことで開かれるであろう、新たな視座についてまで言及しえなければ、正しく論評したことにはならないだろう。冒頭で述べたように、国民国家の歴史ならびに世界史というものを再検討するために宮崎の通史を読み直す、それが本稿の第一の課題だと考えている。その立場から、本章では『アジア史概説』はどう評価しうるのかについて論じてみたい。

本章において最初に指摘したいことは、宮崎が「アジア」という語を、独特の含みをもたせて用いていることである。「アジア」にまつわる微妙なニュアンスとは、はたしてどのようなものであったのだろうか。宮崎には、著作になっていないものを収録するという方針で編まれた、大部の論文集が２種類ある。それぞれのタイトルは、全５巻からなる『アジア史研究』、ならびに全３巻の『アジア史論考』である。この表題には、アジア史というものは中国を中心にすえる東洋史とはまったく異なるものだ、という宮崎の強い信念がこめられているように思われる。東洋史とアジア史の違いについて、礪波護が以下のように簡潔にまとめている。「東洋史という時には、どうも中国中心になる。それに対してアジア史という時には、アジアの中心はどこかということは言われなくなってきている。アジア史とは世界史全体の一つの郷土史である、地域の歴史である、と認識されている」[27]。この指摘はまた、本人自身が『宮崎市定全集２東洋史』の跋文の中で、アジア史には中心がなく、その意味では、世界史に近いと断言していることとも平仄があっている[28]。そのことを念頭に置きつつ『アジア史概説』の本文に、じかに触れてみることにしたい。

「アジア史とは西アジア史と中国史とインド史と、その他幾つかの別々の歴史をたんに一冊の本に綴じ合わせたという製本屋の仕事」ではないと宮崎はきっぱりと言い放つ。ならば彼が思い描くアジア史とは、いったいどういう内容のものなのだろうか。「いやしくも自己の記録をもつようになった文化民族ないし国家は、たがいに交通という紐帯によって緊密に結びつけられている。そして相互に啓発しあい、競争しあい、援助しあいながら発展してきた」。「一見相違した文化を、まったく孤立したものと見ることなく、時代差、地域差を考慮に入れつつ、これらを統合して、一つの系図を作成した」もの、それが宮崎のいうアジア史であった[29]。もちろん、これを地球大に引き伸ばすときに、本稿が手繰りよせようとしている新しい世界史像は立ち現われてくるはずである。

「アジア」の一語にこめられた宮崎の思いは、あらまし以上のようなものであった。そのことを理解した上で、本章の第二の論点に移りたい。すなわち『アジア史概説』では、とくにその後半において、「ナショナリズム」が強調されている、ということについてである。それは間違いなく、アジアの近世とは何なのかに思いをめぐらすさいに導入されたものであった。この二つめの問いは、『アジア史概説』が出版されるまでの経緯、ならびに正続二編からなる本書の章構成とも大きく絡んでくるだけに、少し敷衍しておきたい。ここでもやはり、礪波による適切な評言に触れておくことが有益であろう。

元来『アジア史概説』は、上述のように『大東亜史概説』のために準備されたものであった。中国を担当した宮崎は、1944年に上古（古代）から唐までの原稿を仕上げていた。しかし翌年の日本の敗戦によって、当然のごとく、刊行の話も立ち消えとなっていた。だが戦後の

1947年になり、草稿に手を加えたものを出版する手はずが整えられた。それが本書の３章までに相当する『アジヤ史概説』の「正編」である。だが話はそこで終らない。「続編」を担当するはずだった盟友の安部健夫が病気をわずらったため、やむなく宮崎が「続編」の筆を執ることとなったのである。これが４章から７章にあたる部分である。礪波がここで、本書の前半と後半とでは、「項目の長さも文体・語気も異なっている」[30]と述べているのは、重要な指摘である。

そこで問題としたいのは、「異なっている」理由である。『大東亜史概説』と関りの深い、『アジヤ史概説』の正編あるいは本書の前半３章との関連に触れた研究は少なくない。しかし前半（正編）と後半（続編）の違いについて、いまだ正面から取り組んだ研究はないといえる。本章の残りの部分では、『アジア史概説』の前半と後半の間に横たわる断絶を、宮崎の記述に密着するかたちで論じてみたい。それは本書において宮崎が、東洋史からアジア史、そして世界史へと向った、飛躍の軌跡を確認したいがためである。

本書の前半と後半の間にある差異とは、何であろうか。さきに触れたように、ここではとくに後半で強調されるようになった、「ナショナリズム」という用語に着目したい。彼は明らかに近世の指標とするために、この語を選んでいる。そしてこれは前半と後半の違いのみならず、前著『東洋における素朴主義の民族と文明主義の社会』からの脱却とさえ受け止めることのできる重要性をもっている。宮崎は、アジアにおける近世なるものを捉えようとしえた場合には、どうしてもナショナリズムの問題を避けて通ることができなかったのである。

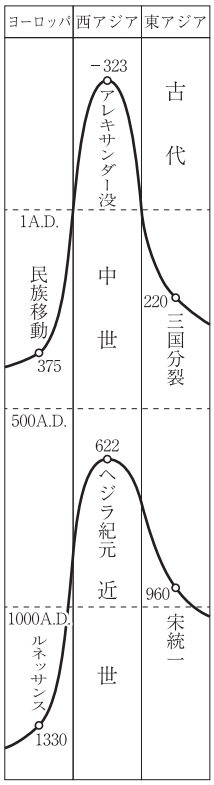
アジアの近世は次のように語られる。サラセン帝国（イスラム世界）の成立は、必ずしも数の勝利ではなかった。「特殊な宗教の力」によるものと解したほうがいい。しかもその宗教とは、単なる「神に仕える宗儀」に限らず、「アラビア人の全生活の総合である宗教」であり、ひいては「武力をも経済をも包含するものであった」。また「言語の親和力が宗教的活動のなかに重要な位置を占めていた」。「民衆と神との間に僧侶階級の存在を認めない代りに、そこにはアラビア語が厳存し、この言葉によってはじめて民衆は神に近づくことができる」という確信がめばえた。こうして多様な民族が、宗教ならびにアラビア語を介して一つの民族となったのである[31]。

ここで注意が必要なのは、このナショナリズムが、一国の閉鎖的な国家主義を意味しているのではなく、宗教と言語を共有することで生じた、いわば開放的な民族主義であるということである[32]。「西アジアからはじまった近世的ナショナリズムの潮流は、トルコ民族を経由して、蒙古、満州民族に及び、その勢力におされた漢民族は、はじめて消極的ながら国民意識のめざめに移りかけた」[33]。女真族の金が宋の北部を占領し、漢民族は大陸の南半分の南宋へ移る。その南宋も亡び蒙古の元が建てられると、もはや漢民族は国民的自立をも失ってしまう。だが、モンゴルの大帝国により世界との交流が活発になっていた。中国の南部が、その恩恵に与った。それにより「漢民族の復興運動が起り、それが明王朝の成立として結晶する」。「明の興起は、漢人ナショナリズム運動の最初の成功であるが、ここに一つの矛盾があった。それは古来漢民族の間には中華思想があって、異民族を自分よりも一段と劣った夷狄としていやしめるから、夷狄に奪われた中国の自由を回復するのは、もちろん美挙である。しかしこれと同時に

中国には君臣の名分を正さなければならない大儀がある。いったん臣下として君主に仕えた者は、君臣の大儀の前には私身を省みてはならないのである。明が攘夷のスローガンを掲げて、異民族元王朝にたいする反感をあおっても、いったん元王朝の臣下となった者であるから、それは大義名分を破る行為と認めなければならない」[34]。

さらに３点目に強調しておきたいのは、ナショナリズムの用語の導入と並行して、宮崎の手になる世界史年表が、はじめて公にされたことである[35]。彼の独創ともいえるこの略年表は、以後幾度となく登場し、最終的には次章で論じる、『中国史』において完成されるものである。もちろん『アジア史概説』の段階では、

図表１　世界史略年表１
（『全集18巻』、190ページ）。



まだ荒削りの状態である。だがその年表を裏付ける世界的事件の同時代性に関する記述は、以後繰り返し述べられることと、ほぼ同じである。それをまとめて、本章の締めくくりとしたい。

西アジアではペルシャ帝国が、もっとも早く古代帝国を建設した。ペルシャはキュロス２世（CyrusⅡ，紀元前600年頃〜紀元前529年）のとき、メディナより独立する。その子のカンビュセス２世（CambysesⅡ，？〜紀元前522年）の治世においてエジプトを手中に収める。ダレイオス１世（DareiosⅠ，紀元前558年頃〜紀元前486年）が出て、バルカン半島からインド国境におよぶ版図となる。このダレイオス１世の帝国建設が、古代文明の頂点であるといえよう。彼は自らを王の王と称した。都のスサから小アジアのサルディスに至る軍用道路を作る。この流れを世界史のなかにおいてみると、ギリシャ都市国家からローマの統一になり、東洋史に当てはめると中国の春秋戦国の小都市国家から秦・漢帝国の成立へという流れに相当する[36]。

だが古代世界は分裂を余儀なくされ、やがて「中世的停頓の時代」にはいる。多くの場合、外部勢力の攻撃により分裂の様相を呈するようになる。ペルシャ帝国はギリシャ人の侵入を契機に東西に分断し、漢は三国南北朝に分裂した。ヨーロッパの場合も同様に、ゲルマン民族の侵入によりローマ帝国は東西分裂の憂き目にあう[37]。

ただし分裂と停頓に象徴される中世であるが、必ずしも否定的な側面のみとは限らない。別の見方からすると、「政治的に便宜の小区域に分割されることにより、その内面生活を充実して、来るべき新段階、すなわち近世的展開にそなえるための準備の時代」であるともいえるからである。つまり近世を準備する期間という

意味で、中世は積極的に評価しうる余地をのこしている、ということである。西アジアではアラビア人の活躍、中国では宋の建国が近世史的発展の開始を告げる。その後、「十字軍による両地域の接触」が、「ヨーロッパ近世化の原動力となった」。そして西アジアがヨーロッパへ与えたことと同様の影響関係は、西アジアと東アジアの間にも存在したであろう[38]。

このように、視座をあたう限り押し広げたときに垣間みえる、アジアとヨーロッパの「平行的発展段階の傾斜」と「傾斜の平均的運動」を明らかにするものこそ、宮崎が考える世界史であったのだ[39]。『アジア史概説』で宮崎がたどり着いたのは、そのことであった。

Ⅳ．中世という「大きな谷間」の発見

ここで簡単に、これまでの議論を振り返っておきたい。第Ⅱ章では、『東洋における素朴主義の民族と文明主義の社会』を読み解いた。素朴民族と文明の相克のなかから、次第に国内の統一が進み帝国が成立し、やがて今度はその帝国が周辺の民族と新たなる対立をはじめるようになること、それがまさに「東洋的古代」の姿であった。要するに現在の東アジアに相当する「東洋」の、しかも時代を古代にまでさかのぼらせた場合には、諸民族の攻防ないし対立による歴史記述が有効であるということが、第Ⅱ章で主張したかったことである[40]。つづく第Ⅲ章では、近世というものはナショナリズムによって成立するということが、『アジア史概説』を執筆する時点で、はじめて明示的に表明されていることを明らかにした。それは措辞の上でも、「東洋」から「アジア」へという、それぞれの用語がもつ含みの違いとなって現われている。

ついでながらここで想起しておいてよいのは、宮崎の師匠の一人であった桑原隲蔵（1871年～1931年）の時代区分である。中国よりは広く、アジアよりはせまい東洋という範囲内であれば、桑原の区分は便利な指標となりうる。その論拠は明快である。すなわち、「民族勢力の盛衰興替」に他ならない。桑原の区分を宮崎の解説にならって要約してみよう。

桑原のいう上古すなわち古代は漢民族膨張の時代、中古すなわち中世は漢民族が塞外民族と衝突するが、まだ優勢を保っている時代、近古すなわち近世は「蒙古族優勢の時代」とする。モンゴルの優勢は、五代遼にはじまり明代にもなお影響力をもっていたからである。清になると、今度は西欧人により侵略を蒙る時代となった。混乱を招きやすいのだが、近古につづく最後の区分を桑原の用語では近世とされている。これを宮崎の言葉で言い直すと、最近世ということになる[41]。

宮崎や桑原のように、民族の対立と興亡を目印に、時代を区切るのは、一見すると明快である。しかし対象となる範囲が「アジア」全般にまで広がると、そうはいかない。対立というよりは交渉という、より緩やかな相互作用の概念のほうが、歴史の記述には相応しくなるからである。そうなると、対立や相克という基準が使えないぶん、時代を画する基準自体があいまいになってしまう。そこで持ち出されたのが、近世を特徴づける基準としての、「ナショナリズム」概念だったというわけである。このように、２冊の通史での模索を通じて宮崎は、空間的には東アジアをはじめとするアジア各地と、時間的には古代から近世にいたる時代とを統合的に把握する歴史社会学の方法が、かなりの程度整備できたといえるだろう。そうした蓄積のもとに、研究対象をいっきに絞りこんで書かれたの

が、宮崎の３冊目の通史『中国史』であった。本来ならば、これよりただちに『中国史』の解説に移ってもよさそうなのだが、ここにどうしても看過できない問題がのこされている。一つは、中世の内容に関することである。なるほど古代と近世が明らかになったのであれば、その中間にあるのが中世である、と片づけてしまうこともできるだろう。しかし中世は、古代と近世に挟まれた、単なる移行期であると言い切れるほど、単純なものではない。そこにもやはり、他の時代と異なる指標がなければならないのではないか。それを確定してからでないと、正しい基準に基づいた通史というものは書けないはずである。

それに付随して、三部作のそれぞれの出版時期にかかわる、いま一つの疑問にも答えておかねばならない。『東洋における素朴主義の民族と文明主義の社会』ならびに『アジア史概説』は、宮崎の研究経歴の中では、初期に属する上に、さほど間をおかずに書かれた著作である。それに対し『中国史』のほうは、前２作とはかなり間をおいた、最晩年の作といってもいい。したがって『中国史』は、宮崎の通史の集大成にして決定版であるといっても過言ではない。実際、『アジア史概説』と『中国史』との間には、どうしても無視することのできない宮崎の思想的、方法的な変化を確認することができるのである。宮崎の基本的視座には、いったいどのような変化と補強の跡がうかがえるのであろうか。この期間に宮崎は何を発見したのか。これらの疑問に答えるのが、本章の課題である。

ここで注目したい著作が、『大唐帝国』である。表題こそ唐王朝を謳っているものの、中身を紐解いてみると、唐王朝を論じている部分は、ほんのわずかにすぎない。時代でいうと三国分立から隋・唐をへて、はては五代にまで筆は及んでいる。これが実は宮崎の定めた時代区分でいうところの、中世に相当する時期を、そっくり含むものであった。副題に「中国の中世」と大書されているのは、そのためである。

宮崎は1955年以降、漸く重い腰をあげて、中世史の研究にのりだすようになった。齢すでに50代半ばを迎えている。『アジア史研究』に納められている諸論文を年代順に並べてみるとわかるとおり、それ以前は、宋代以降の近世史か、あるいは漢代以前の古代史が中心であった。かねてより中世史に関心がなかったわけではない。むしろ「中世を中心として、古代から中世への変化、中世から近世への発展」の後を追うことができるため、歴史学においては、「もっとも重要な意義」をもっているのが中世であると重視していた[42]。にもかかわらず、この方面での研究を遅らせたわけを訊ねるとするなら、その一つには外在的な理由があげられよう。すなわち同僚であり先輩でもあった那波利貞（1890年～1970年）が、同じ京都大学で中世史を担当していたことである。そのため宮崎は、中世史の研究を遠慮していたというのが実情のようである[43]。事実、那波が京都大学を退官する1953年以降、宮崎の中世史研究は、いよいよ本格的に始動した。さらに高弟の佐伯富（1910年～2006年）に近世史をまかせるようになり、念願かなって中世史にのめりこむことができた[44]。

上述のように『大唐帝国』が扱っているのは、表題にある唐だけではない。３世紀の三国から隋・唐をへて、10世紀の五代にいたる、実に740年におよぶ歴史である。これを中世と呼ぶようになった由来をただすと、内藤湖南にたどりつく[45]。『大唐帝国』の冒頭、宮崎は内藤の意図をくんで、その時代区分を次のようにかいつまんでいる。ヨーロッパの中世を比較するとき

に、内藤の東洋史における中世の区分は大変便利な尺度となりうる。すなわち三国から五代とつづく時期は、ちょうど「ヨーロッパにおける民族大移動の開始から、神聖ローマ帝国をへて、十字軍の終焉、つまりルネサンス前夜にいたるまでの八七〇年の歴史に相当する」[46]と。そういわれてみると確かに、かなりの類似点を見出すことができる。そればかりか、唐を脅かし続けた北方の匈奴が、中央アジアを突き抜けて、ヨーロッパに侵入したゲルマン民族に、直接的または間接的に影響を与えた、といわれることもある。いわゆる匈奴＝フン族説である。仮にこれが正しいとするなら、東西の中世のはじまりが、いよいよもって外見の類似というよりは、同一の原因による二つの作用といったほうが、相応しいとさえ思えてくるはずである。

こうした時代区分は、しかし内藤以前の通説とは、まるっきり異なるものであった。「内藤博士以前の東洋史家は、ほとんどもれなく、中国中世は秦の統一からはじまる」、「言い換えれば戦国時代のおわりまでが古代史」だと判断してきたのである。しかしこれだと中世が恐ろしく長くなる。もちろん、そうした考え方に根拠がなかったわけではない。秦の統一は、中国史上の「画期的な出来事」にして、「最大の大統一」であったからである。だが、それにもかかわらず、秦を中世とすることに対して、宮崎は異議をさしはさまざるをえなかった。それはやはり、ヨーロッパの歴史の比較にたえうる正しい世界史の土台を作りたかったからに他なるまい。大帝国を建設したことで秦になぞらえられるローマ帝国は、西洋史における中世のはじまりを意味するのであろうか。違うだろう。古代と中世の区切りは、ゲルマン民族の大移動をもってはじまりとされている。だとすると、前章でも述べた通り、これを中国史に置き換えると、三国の分裂に相当すると考えるのが妥当なのではないか。これが宮崎の見立てであった。こうした発言を宮崎が繰り返している理由は、ただ一つ「三国の分裂がはじまる時代から中世が始まるとみるのは、東西両洋を比較研究するうえからも、もっとも効果的な見方だ」、という主張をせんがためであった。しかも彼は、次のように言葉を重ねる。「ほんとうは東西両洋の歴史は、それを深く研究すればするほど、おどろくほどの類似性をその根底にもつことを発見するものである。歴史の研究はなによりも、従来なおざりにされてきた、この種の平行現象の探求からはじめなければならない」[47]。その「比較の足場」の一つが時代区分とであったというわけである。そしてこれこそが、歴史社会学者としての宮崎の立場表明であったことはいうまでもない。

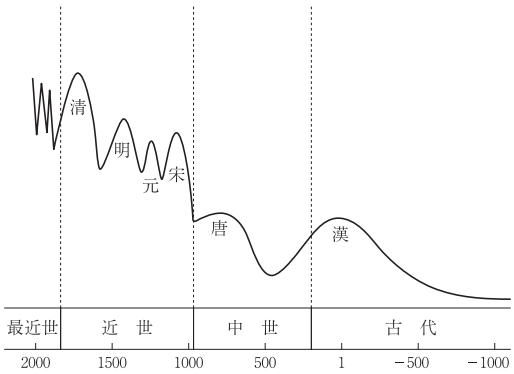
上記のところまでで、中世というものを少なくとも形式的には説明できたと信じている。しかし肝心なことは、その中身である。中国の中世とは、いったいどのような内容をもつものであるのか。ふたたび『大唐帝国』の本文にたちかえろう。中世には、いたるところに権力者がいる。その力が均衡していると平和であるが、その均衡は崩れやすい。どこかの力の加減が変化しただけで、すぐさま他へと波及するからである。その変化の犠牲は権力者のみならず、その何倍の数の民衆にまでおよぶ。中世とは、そうした平和とその揺らぎを往き来する不安定な時代だった。またそうであればこそ、宗教が重んじられることとなる。「中世は宗教の時代だといわれるのにはたしかに理由があった」。こうした「中世人の苦悩にみちた生活は、しかしやがて近世を迎えるために貴重な捨て石となった」[48]。「捨て石」という言い回しは、誤解を招くかもしれない。しかし宮崎は、この時代の

ことを貶めたり、過小評価したりしているわけではない。かえって、これまで中世は暗黒時代といわれ、あるいは唯物史観により、古代と近世を結ぶ発展の途中の「ふみ台」にあたるとされたことに対して、宮崎は懐疑の目を向けている。「近世初頭の人びとが、中世からぬけ出したという自覚と、その歓喜とに同情したい」としつつ、「ふみ台」ではなく「くぼんだ谷間」と表現したらどうかと宮崎は提案している。

「くぼんだ谷間」とは、絶妙な言い回しである。いったい何のくぼみかというと、景気循環の落ちこんだ部分であり、宮崎はそこに中世を象徴する経済現象を、ひいては社会文化現象を発見したのだ[49]。そのくぼみを目に見えるかたちで図示すべく考案されたのが、「中国史上景気循環概念図」であった。この図を作成したことで、それまで温めてきた宮崎の時代区分論は、がぜん説得力を増していく。

1963年ごろから宮崎は景気循環への言及をはじめ、それを用いて中国史を解釈しようとするようになった。きっかけを作ったのが、1960年から約２年にわたる、フランスとアメリカへの外遊である。このときに得た経験が、景気変動論への関心をもたらし、それとともに時代区分論に対する修正の必要を感じるようにもなった。それは中国史には、昔から現在にいたるまで景気変動があって、それが社会や経済や文化に大きな影響を与えているという着想であった[50]。見落とされがちなのであるが、そのことをはじめて公表した記念碑的労作が、吉川幸次郎『宋詩概説』への書評であった[51]。彼はこの書評の中で、景気循環概念図にかける意気込みを、次のように語っている。「私の時代区分論は決して何時迄も同じ水準に止まっているものではない。私は近頃、単に時代区分の問題ばかりでなく、中国経済史の方法について、今迄よりも少し違った角度から見直す必要を感じているのである」。その上で、「中国史上には古くから、現今の世界に似たような景気変動が行われていて、それが社会のあらゆる方面に影響を与え、この角度から歴史を見たときに経済も文化も同時に視野の中に入って来るのではないか」[52]、と今後の展望を語っている。

図表２　中国史上景気循環概念図
（『全集８唐』、329ページ）。



これをそのまま中国史に当てはめるとなると、どのような歴史が描けるようになるのであろうか。後漢ごろから不景気の時代におちいり、「深刻な不景気風」は、唐末五代までつづく。一転して宋代からは好景気が到来する。木炭から石炭へのエネルギー革命が、それを後押しした。銅銭や鉄製工具の生産により、交易が盛んになり、生産力が上がった。嗜好品の面では、絹や茶や陶器が「世界的な商品」となった。「宋代以後の景気変動線は大体上昇の方向を辿るが、但し一直線に上るのではない。前代の景気変動線においても、それは決して単純な上下ではなく、そこには別に第二次的な短い周期の上下線が入り雑じっていたので、ただそれがあまり強く現れなかったところ、宋代以後になると、この短期的変動線が著しく現れるようになり、その周期は大体、一王朝の興亡と並行する」。「北宋時代の好景気は南宋にはいると下り

坂に向かい、景気の沈滞、更には不景気が訪れてくる。これは朝廷の財政不如意が不換紙幣の濫発を余儀なくし、その結果が貨幣の死蔵、海外への流出を促したからである」[53]。

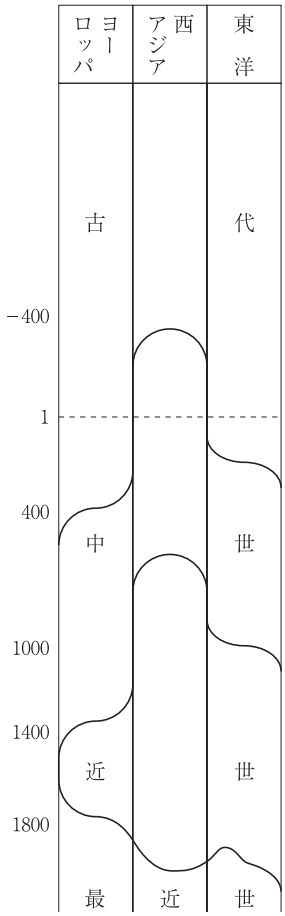
書評にしてはやや我田引水のきらいがあるものの、宮崎の景気循環史観を理解する上では、格好の素材を提供するものであることに変わりない。『大唐帝国』とは、このような立場から中国の中世史を論じきった、最初の著作であった。本書を「世界でおそらく最初に、数量史観を唱道するゆえんは、それがこの時代ばかりでなく他の時代の理解にも役立つことを期待するからである」[54]とむすんでいるのは、それに見合う確乎たる根拠があったからに他ならない。そして実際に、「他の時代の理解にも役立」てられたのが、次章で取り上げる『中国史』であった。

Ⅴ.『中国史』から世界史へ

中国に即した区分であり、かつ世界史との比較を可能にする新たな時代区分、それを求めて発案されたのが、宮崎の世界史年表であった。重複を顧みず再度引用すると、研究においては、「常に世界史を予想して考察して居り、世界史の体系を離れて孤立して個々の事実を考えたことは一度もない」[55]。これは間違いなく宮崎の信念を吐露したものであろう。ただ率直なところ、この年表が発表された当初の段階ではまだ詳細な説明が加えられておらず、やや蕪雑に貼りつけられただけとの印象がどうしてもぬぐいきれない。内容をより深く吟味するには、時代区分論争[56]などをへた、宮崎のその後の仕事まで追いかけておく必要がある。それには直接に着想をえた内藤湖南をはじめとする時代区分論をもう少し丁寧に検討することが欠かせない。これが本章の一つめの課題である。その上で前章の後半で予示しておいたように、彼は景気変動史観という新たな知見から、今度は中国史全体を見渡そうとしていたことの意義を正しく理解するよう努めたい。それにより『中国史』では、それまでの時代区分論を景気循環史観によって補強していることを知ることになろう。

それではさっそく、第一の課題に進みたい。『中国史』冒頭では周知の世界史略年表[57]を示すとともに、それに対して、かなり長文の解説を書いている。しばらくのあいだ、その宮崎による解説に密着してみよう。彼の手にかかる世界史年表は地域的には三つ、時代的には４つに分かたれている。前章までにも再三述べてきたように、時代区分の仕方は、内藤湖南流のそれである。繰り返しておくと、東洋の近世は、宋、元、明、清の大部分である。それに先立つ漢までが古代、三国から六朝、唐、五大までが中世になる。もし近世を二つに分けるとするならば、清末に中国は最近世に突入する[58]。ここで一言注釈しておくと、宮崎が近代ではなく、あえて最近世と称していたのには理由があった。「近代」には、「近世に対するアンチテーゼ」としての響きがある。その批判の論調を弱め、「近世的傾向を一層強く推し進めた」という語感をこめるために、宮崎は「最近世」という用語のほうを愛用したということである[59]。それはさておき、彼の時代区分においてとくに注目しなければならないのが、ルネサンスを発端とする近世の動きである。ルネサンスといえば、大方は西洋のそれが容易に連想されるだろう。しかし宮崎の場合は違っていた。東洋にもルネサンスはあり、さらにさかのぼると西アジアにたどりつくとしたからである。もっというとアジアのルネサンスは、西洋に先んじていた、とさえ宮崎はいうのである。「西アジアの近世は、

図表３　世界史略年表２
（『全集１中国史』、18ページ）。



東洋よりもずっと早く始まっている」のみならず、「東洋に影響して、そのルネサンスを出現」させた。ところが遅れて近世化した東洋のほうが、西アジアよりも洗練された文化を生み、それが西アジアにも逆流している。同じことがヨーロッパの近世についてもいえる。「東洋が近世化した初期において、ヨーロッパはまだ中世」であった。つまりヨーロッパの近世をアジアが準備した、ということを宮崎はここで主張したかったのである。「ヨーロッパのルネサンスには、東洋のルネサンスの影響があった」。もしルネサンスと聞いてヨーロッパを連想するのだとしたら、それは「最後に出て最も完成したヨーロッパのルネサンスは、もう一度逆流して、西アジア、東洋へ影響を及ぼすようになる」、という事実によってである[60]。

ここまでくると、なぜ宮崎があくまでも世界史との連動関係にこだわりつづけたのかが了知できるだろう。それは単純には、「世界中の各地域は、何等かの方法で、他の地域とある程度の連絡を保ち、交渉を続けて来た」からということもできるだろう。しかしこれを世界史年表に基づいて、次のように言い直すこともできるのではないだろうか。すなわち、同年代の比較では見えてこないはずのものが、時代区分による「同段階」を比較することで、見えてくるものが少なくないと。だからこそ宮崎は、世界史にこだわりつづけたのであった。したがって、「世界史に関連のあるものほど、研究に値する」、と言い切れるのである。だがそれは、「広い地域に共通する問題ばかりが世界史に関連するとは限らない」、と宮崎はただちに補足する。世界史は各国史を否定するものであってはならない。各国史でありつつ、なおかつ世界史でもありえる歴史というものが可能なのである。それは、どのようなものなのであろうか。本稿では『中国史』こそは、各国史であるのみならず、世界史でもありえるような歴史記述をめざし、見事成功させた稀有な例であったと位置づけようとしている。そうした評価は、これまで見過ごされてきた視点ではないだろうか。地域的広がりを横の軸、時代の流れを縦の軸にした世界史年表がもつ意義は、宮崎の次のような発言に盛られているようである。「私〔宮崎〕が世界史の座標に要求している縦の発展の時間線も、横の地理の線も、それらは数学の線であっては困る」。「歴史上の座標軸になる線は、幅もあり、重さもあり、何よりも学者の個性が滲んでいる

ものでなければならぬ」[61]。

単純な数字に還元するわけにはいかないことは、例えば１年間に起きた事件数についてもいえるだろう。たった１年の間に、数多くの事件が起きる場合もあれば、決してそうでない場合もある。また事件が少なければ、それだけ停滞しているかのように感じられるであろうが、そうではない。現代と比べてみると、確かに古代は社会の動きが緩慢である。事件の数も少ない。しかし重要なことは、「古代の緩慢な動きによっても、それが長時間かかれば達成できる大きな成果を無視してはならない」ということ。また逆に、「現代の急激な社会の動きの裏に、本当に人類全体の為に有益な進歩が果たしてどれだけ出来たかの評価を慎重に見極めなければならない」ということも忘れてはならない。おまけに、ある現象（例えば鉄器の使用）がはじまるのに要した時間の長短についても、単純に数量的時間として計算するわけにはいかない。現象の内容を深く吟味しなければならないのは、例えば「発明」は難しくもあれば、長い時間を要するものでもあるのに対して、「模倣」のほうは、よほど容易であり、短期間になされるからである。宮崎が「歴史学には時間の評価が大切である」、あるいは「歴史学とは時に関する研究」であると断じ、生涯をかけて時代区分論と世界史年表の完成につとめたのには、こうした深甚な意味があったからに他ならない[62]。

ただし、幾度となく使われている宮崎の世界史年表には、ついに南アジアやアフリカが書きこまれることはなかった。それは交渉の歴史という観点からすると、インドとアジア諸国とが、あるいはアフリカと西アジアならびにヨーロッパとが、相対的につながりが薄い、という宮崎の認識に基づいてのことであった。だとしても少なくともインドに関しては、第Ⅲ章で検討した『アジア史概説』の三本柱の一つでもあっただけに、年表に加えられなかったことは残念でならない。そればかりか東南アジア諸国のなかには、中国よりもむしろインドからの影響が濃いところが散見できるのではないだろうか。アフリカについても、イスラム帝国や近代以降のヨーロッパとの関連で北部のマグレブ地域に言及しなければならないだろう。さらにアフリカの奴隷貿易は、近現代の欧米にはたした役割を考える上で無視することのできない世界史のトピックのはずである。そうした意味で、宮崎の世界史年表のなかに南アジアやアフリカが欠落していることには不満をのこす結果となった。

だが以上のような弱点を有する時代区分論であったものの、景気循環史観という新たな着想によって塗り替えられることで、新たな生命が吹き込まれることとなった。それを史実に即して説明していくのが、本章の二つめの課題である。それでは景気循環史観によって潤色された、古代から近世までの中国史論を見ておきたい。古代とは、「長い間分散して生活していた人類が、次第に求心的傾向を以て大きな統一に向う過程」であった。これを新たに付け加えられた景気循環史観によって解釈すると、次のようになる。「古代は好景気が連続した時代」、「古代なりに高度成長の行われた時代」である。技術の進歩、資源の開発、商業の拡大などが確認できる。「商人は黄金を求めて、周囲の異民族の間に進出して中国製品、絹や工芸品を売り拡める。造れば造るそばから売れるという、好ましい経済状況が現われてきた」。そしてこれは当然、西洋史との比較が行なわれる。「ローマでは富豪クラッサス〔クラッスス〕が金力によって、ケーザル〔カエサル〕等と結ん

で三頭政治を企てたことは有名であるが、中国におけるクラッサスとも言うべきは、秦における政商呂不韋」である。クラッスス（Marcus Licinius Crassus，紀元前115年頃～紀元前53年）も呂不韋（？～紀元前235年）も、ともに非業の死を遂げた。政治と経済は相容れないということだろう。清代史家であった趙翼（1727年～1812年）が『廿二史箚記』で書いている、「漢に黄金多かりき」と。古代史の発展は、この一言で言い尽くされていると宮崎はいう[63]。

ならばつづく中世とは、どのような時代だったのか。古代末期の漢は金が豊富であった。いわばインフレーションによる景気である。それが漢の武帝の時代に、西域との交通貿易が開けることで、金が流出をはじめた。一般に先進国の品物が流入し、後進国の貨幣が流出する。「中国と西域を比較した際、何と言っても西域は古い文明をもった先進国である」。西域から中国に、ガラス製品が輸入される。こうして古代末には輸入超過の不景気の時代となった。「凡そ経済現象の中で、直接一般民衆の生活に影響するのは景気の好悪に如くものはない。そのうち好景気の方はそれと感付かれずに済むかも知れないが、一転して不景気となるとこの方は骨身に沁むのである」。「生産が停滞し、働き口がなくなり、潜在失業者の数が増え、日常生活が圧迫され、生活水準は低下を余儀なくされる」。このような社会が一般化するのが中世である。不景気の時代には、安全志向となり、危険性の少ない企業が好まれる。投資も比較的安心な土地への投資が増える。「司馬遷はその史記の貨殖伝において、古来からの富豪の列伝を記載しているのであるが、此処では農業はあまり問題にされていないのは不思議である」。しかしその司馬遷（紀元前145年ないし135年～紀元前87年ないし86年）でさえも気をひかれたのは、秦陽ならびに寧成なる生没年不詳の人物である。これらの人物に言及することにより、司馬遷は商工業での儲けを農業へと投資することの重要性を説こうとしているのである[64]。

不景気という「大きな谷間」に落ちこんだのが中世である。とすれば、それから抜けだそうとするときに、近世ははじまるといえよう。すなわち好景気の再来である。宮崎の区分では、唐と宋の間に近世のくさびを打ちこむ。唐末は、国が財政国家へ変貌する時代であり、それを宋が完成させた。自給自足的な経済から、流通経済が発達した。資源開発と、地方の特産物の発生、隋の時代にさかのぼる大運河が、漸く民間でも利用されるようになる。政府は商人への課税を市単位ではなく、「行」という組合単位で徴収するようになった。「行という独占営業権を認める代りに、各行が責任を以って自主的に納税することを命じた」のである。さらに商品の中でも利益の高いもの、わけても食塩などは専売制にし、国家の財源をうるおした。商業の拡大は好景気をまねき、ひいては技術革新を促す。宋の技術革新の一つとして、石炭の利用があげられる。石炭は木炭と比べ、臭いと煙の多さから、敬遠されていた。しかし人口増加により、木炭も払底してしまう。そこで石炭から作った炭団を用いる方法が考案された。これが石炭を厨房や暖炉へ利用することを可能とした。確かにこれは、技術革命であり、一種のエネルギー革命であったといえるだろう。石炭が大量に利用されだすと、つづいて鉄の生産への応用が試みられるようになったからである。鉄は農具や工具として利用価値が高い。こうして経済発展と技術革新とが並行して起きた。陶磁器や絹織物に加えて、鉄も輸出を禁じられていたにもかかわらず、とても安価であったことから、西アジアへの流出が絶えなかった。そして

その代価として銀塊が支払われた。このときに流入した大量の銀のおかげで、中国では中華民国の時代まで銀本位政策がつづいた[65]。これらはすべて、中国の中世の大きな成果であったといえるだろう。

このように宋代に完成に達した中国の近世文化ではあったが、一時的に停滞するようになる。それは景気に歯止めがかかったためと思われる。実際、宋末に起きたことといえば、「富の偏在による上流階級の奢侈生活」、「政治腐敗」、「地方人民の反抗運動」などに加えて、「東北から女真民族の建てた金王朝の侵入」などによる、景気への決定的な打撃であった。そしてついにモンゴル大帝国の時代へと移っていく。モンゴル帝国は東西交通を活発化させ、つづく元の好景気の基礎を作ったといえよう。しかしそれも、あまり長続きしなかった。西アジアのモンゴル部族が分離し、好景気は永続せず、かえって不景気となったからである。明に入り漸く、やや景気は上向く。だが全体としては、やはり下降傾向を示していた。経済を根本的に立て直すのは、清の時代である。康熙帝（1654年生～1722年）をへて雍正帝（1678年～1735年）から乾隆帝（1711年～1799年）の初期にかけてが、経済の全盛期である。その景気をかたむけた原因が、またもや銀塊の流出にあった。せっかく輸出によって貯めこんできた銀塊を、アヘン購入のために使い果たしてしまったのである[66]。

上述のように『中国史』には景気循環史観による興味ぶかい歴史解釈がなされている。古代の隆盛、中世のくぼみ、そして近世の４度にわたる景気の波、これらは前章で紹介した「景気循環図」を、そっくり文章に移し替えたものに他ならない。中国の歴史のうねりが感じとれるのではないだろうか。だが不思議なことに、その図そのものは、本書において転載されなかった。それはなぜだろうか。宮崎は主として貨幣を指標として景気をうらなっていた。もとよりその指標を使って、古代から近世にいたる長期の景気循環を数値化しようとするのは、かなり困難を伴うものであろう。確かに宮崎が図式化した長期の景気循環図は、イメージとして用いるには便利この上ない。しかし、それを現実のものと受けとってしまうには、よほど注意が必要である。『中国史』に景気循環図を盛り込まなかったのは、そのためではなかっただろうか。

しかしだからといってこれが、数量化の否定を意味しているわけではない。景気変動にこだわらず、別のものを数量化してみることも一考にあたいするのではないだろうか。例えば歴史統計学の先駆的な業績ではあるが、リー(J.S. Lee)による中国史における戦乱研究[67]は、その試みの一つにあげられるだろう。現代であれば、さらに豊富な歴史統計学の蓄積を活用することもできるはずである。宮崎自身、「政治の良否が経済の景気の波と一致する傾向がある」[68]としていただけに、それらの資料は、宮崎の研究を発展的に継承しようとする、後学のために残されているといえる。ここでは、宮崎が歴史の変動をグラフ化できる可能性を示唆したことをもって良としたい。

Ⅵ．むすび

最近新聞や雑誌において、世界史を愛好する歴史ブームが取り沙汰されることが多くなった。その流行現象が問いかける問題に対し、宮崎の３度にわたる通史の書き直しは、いったいいかなる意義をもちうるのか。それを明らかにするのが本稿の課題であった。

『東洋における素朴主義の民族と文明主義の社会』では、大胆な時代区分を用いているにもかかわらず、それに説明が加えられることはなかった。まるで決まりきった前提であるかのように使われている。初期の宮崎にとっての最大の関心事は、素朴主義と文明主義の対立であり、さらにいうと素朴主義の民族が文明に打ち勝とうとする歴史像を描くことにあったと見ていいだろう。ただしこれは古代世界の記述においてこそ、有効性を発揮しうるものであった。つづく『アジア史概説』は対象とする範囲が、西アジアや南アジアをも含む、ほとんど世界の半分になんなんとする、実に壮大な概説史の試みであった。その結果であろう、歴史をそれまでの支配と被支配という関係ではなく、交流史として読み解いていくという、穏当な論述を展開している。それにより、彼は古代帝国と近世ナショナリズムという指標を導入して、世界史年表を作成することができた。それらの準備段階をへて書かれたのが、晩年の『中国史』であった。生涯かけてその想を練りつづけた時代区分論に、新たに景気変動史観を付与することで、それが完成されているところに本書の真骨頂を見出すことができるだろう。すなわち歴史の数量化の道を切り拓くとともに、歴史の動態を可視化することに、一定の成果を上げたということにおいてである。

ここからさらに進んで、本稿の課題から見て宮崎の通史から学ぶところがあるとすれば、それはおよそ以下のようになるだろう。単なる一国民国家の歴史というのであれば、近隣にいる他者との対立と協調の図式で描くこともできるかもしれない。古代においてはとくに、そのことはあてはまる。しかし比較的遠い他者との関係までを視野に収めようとすると、そうはいかない。国を超えた、いわゆる地域史になると、おのずとその方法は異なってくる。地域史の場合、ときに自他の対立と協調の場面があったとしても、一般的には交流ないし交渉という視点から読み解けることのほうが多いからである。さらにそれが世界史ともなると、その交流史を、より広い視野のもので総合するような工夫が必要となってくる。その点で、宮崎市定が最終的にたどり着いたのが、時代区分論と景気変動史観であったことは、示唆に富む事実ではないだろうか。世界史を同時代的に比較することを可能にするのが彼の時代区分論であるとすれば、それを数量的に比較するのが景気変動史観であったからである。いうなれば時代区分論が世界史の形式を、景気循環史観が内容をそれぞれ確定するものだといえよう。

歴史社会学の立場から新しい世界史を再構築する。その課題において、宮崎の通史三部作で用いられている方法が、いまだ古びたものとなっていないばかりか、これからも参照に耐える有用な業績であったことに、もはや疑いをはさむ余地はないであろう。

注

1）宮崎市定（1993）『宮崎市定全集１中国史』、岩波書店、75ページ。以下、『宮崎市定全集』からの引用にさいしては、煩を避けるため次の略記を用いる。例）『全集１中国史』、ページ数。

2）ここで宮崎市定の研究歴について、簡潔に述べておく。宮崎は1925年、京都帝国大学に提出した卒業論文での宋代の研究を振り出しに、次第に古代へと関心を移す。さらに明清ならびに六朝唐をへて、再び古代に帰るという研究をたどった。一方、東西交通史や西アジア史、さらには日本古代史にまで研究の裾野を広げた。岡山第六高等学校、京都第三高等学校の教授を歴任する。三高で教えるかたわら、1932年から京都大学東洋史教室で、1933年からは同地理学教室での授業を担当した。そして1934年、京都大学文学部に転じた。

代表作としては、『五代宋初の通貨問題』、『科挙』、『九品官人法の研究』、『論語の新研究』などがあり、論文集としても全５巻『アジア史研究』、全３巻『ア

ジア史論考』の大著がある。ほとんどすべての著作は、別巻を含む全25巻の『宮崎市定全集』（岩波書店）に収録されている。全集に収録された宮崎の手になる跋文のみを収録した（1996）『自跋集―東洋史学七十年』（岩波書店）は、彼の研究全体を知る上で逸せない著作であろう。

なお宮崎の思想と学問を知るには、弟子の礪波護（1937年～）による紹介文に目を通しておくことが有益であろう。彼は宮崎の著作の多くを編集し、そのつど解題を付している。わけても礪波（2002）「アジア史家の宮崎市定」、宮崎市定『アジア史論』中央公論新社所収の一文が、もっとも手際よくまとめられている。

3）東洋史と中国史とは、どのような違いがあるのかを、宮崎は以下のように語っている。あえて区別するなら「中国史は中国民族、或いは漢民族、又はシナ民族の固有の歴史であり、東洋史とは、中国民族を中心において周囲の異民族とを併せ、両者を全く対等な価値において一体として見ようとする歴史である」『全集１中国史』、475ページ。

4）礪波（1987）「解説」『アジア史概説』中央公論社、509ページ。

5）後述するように、この景気変動史観が最初に著作となって現れたのが、本書、宮崎市定（1988）『大唐帝国―中国の中世』中央公論社であった（『全集８唐』に所収）。それを端的に示しているのが、「中国史上景気循環概念図」である。『全集８唐』、329ページ。

6）大学に入学する以前にしたためたノートのなかに、「京都へ行つての仕事」と題されたページがある。そこに記された宮崎の研究課題の１つである。東洋学においては、「塞外」という言葉が重要なキーワードでとされていた。松本善海（1949）「中国社会史の新たなる課題」『史学雑誌』第58巻第３号、86-96ページ。

7）白鳥庫吉（1934）「満鮮史研究の三十年」『白鳥庫吉全集第10巻』岩波書店、403-404ページ。

8）礪波によると、「文化の古い漢民族と北方の素朴な遊牧民族との関係史に興味をもっていた宮崎は、卒業論文の題目に北方民族と中国社会との交渉の一場面として、南宋滅亡期を選ぶことにした」のだという。また大学卒業後は、高等学校で東洋史概説を教える機会に恵まれ、東洋史の通史を書くこととなった。こうして1940年に、『東洋に於ける素朴主義の民族と文明主義の社会』が上梓された。執筆理由は、信頼にたる古代史の教科書がなかった、とのことである。礪波（2002）前掲書、３-５ページ。また本稿の注２も参照のこと。

9）同様の問題を解こうとした論文が、白鳥庫吉にもある。白鳥（1939）「東西交渉史上より観たる遊牧民族」『全集第８巻』、147-178ページ。

10）これに関連する宮崎の研究論文としては、1933年に発表された「古代支那賦税制度」、「支那城郭の起源異説」などがある。いずれも『全集３古代』に所収。中国にもギリシャのような都市国家があったことを明らかにしたのは、宮崎の功績の一つである。また、この都市国家論から約20年をへて、古代史を、氏族制度から青銅器時代（都市国家）へ、そして鉄器時代（領土国家）、さらには共同体（秦・漢の古代国家）へ、という流れで宮崎は促えた。

11）『全集２東洋史』、116、８-９ページ。

12）同、８ページ。

13）「歴史家にとって、歴史概説こそが、同時に歴史哲学であって然るべきだ」というのが宮崎の信念であった。『全集１中国史』、457ページ。また宮崎自身、イブン・ハルドゥーン（1332年～1406年）の『歴史序説』を意識していると語ったこともある。『歴史序説』は歴史書としてはもちろん、歴史哲学ないし歴史社会学の書物として取りざたされることも多い。

14）『全集２東洋史』、10-15ページ。

15）1955年の「中国古代史概論」において宮崎は、この流れを一層明快に述べている。古代史とは分裂していた人類が、次々と大きな結合へと編入され、最終的には、巨大な人類の共同体を形成するようになる。それが古代帝国にいたるまでの経過であると整理している。『全集３古代』３-34ページ。

16）中国史でしばしば用いられる「中原」という地域について、ここで若干、補足しておこう。黄河中下流域にある平原のことで、かねてより中国文化の発祥地と位置づけられてきた。通常は中華文明といえば中原で栄えた黄河文明を意味することが多い。だが後に揚子江に長江文明が発見されてからは、必ずしも中原のみが文明の中心というわけではなくなった。したがって、現在では、北方民族と南方民族に挟撃されることで、中原は洗練した文明を作ることに成功した、と言い換えなければならないだろう。

17）『全集２東洋史』、22-23ページ。

18）同、28、26、33ページ。

19）同、33-35ページ。

20）同、44-46、53-54ページ。

21）同、19、31ページ。

22）宮崎市定（1957）「『アジア史研究』第一　はしがき」『全集24随筆（下）』、490ページ。

23）『全集２東洋史』、127ページ。

24）本書の成立については宮崎の「新版の序」に詳しい。本書は、1947年から翌年にかけて出された正続二編の『アジヤ史概説』に、８章を加えたものである。『アジヤ史概説』は大戦中に企画された『国史概説』と対をなす、『大東亜史概説』に由来する。だが出版前に戦争が終わったため、原稿だけがのこった。それを戦後出版したのが『アジヤ史概説』であるが、これはまた、尾鍋輝彦『西洋史概説』（３訂増補版、1976年-1978年刊）と対を成している。『大東亜史概説』の企画がはじまったのは、1942年７月ごろである。表題が暗示しているように、これは大東亜共栄圏の範囲の全てを含んだ歴史である。これが完成されたあとは、各国語に翻訳され、共栄圏の

国民に読ませる目的を担っていた。

東京帝大の池内宏（1878年～1952年）と京都帝大の羽田亨（1882年～1955年）が編纂の責任者となるが、実際の作業は、東京の鈴木俊（1904年～1975年）、山本達郎（1910年～2001年）、京都の宮崎市定、安部健夫（1903年～1959年）らの手にゆだねられた。当初、文部省より求められたのは、世界でもっとも古い歴史をもつ日本を扇の要に見立てて、それより放射状に皇国の文化が広がっていく様子を歴史として書くことであった。礪波（1987）「解説」前掲書、506ページ。この無理難題に対して、４名は智慧を絞ったすえ、発想をまったく逆に置き換えた。扱う対象を、共栄圏の版図であるビルマをこえ、はるか西のかなたへと押し広げたのである。さらに扇の要を西アジアに置き、日本を文化伝播の終着点に定めたのである。当局がすんなり受けいれたのには、いささか拍子抜けしたものの、「たとえ文部省の意向であっても、後世の物笑いになるようなものは造ってくれるな」との編集責任者の注文にも沿うものであった。「『アジア歴史研究入門』序」『全集２東洋史』、323-333ページ。

その他の文献としては、宮崎（1971）「安倍健夫君遺著の序その一」『全集24随筆（下）』、578-582ページ、宮崎（1959）「『アジア史研究』第二　はしがき」同494-498ページなどを参照。

25）例えば、長谷川亮一（2008）『「皇国史観」という問題―十五年戦争期における文部省の修史事業と思想統制政策』白澤社、250-255ページ。

26）それは書評などにも表れている。荒木敏一（1911年～）は正編を「交通史」であると看破し、続編を佐口透（1916年～2006年）が「東西交渉史」であると評した。荒木敏一（1948）「書評」『人文科学』（京都帝国大学）２巻２号、佐口透（1950）「＜批評・紹介＞宮崎市定著『アジヤ史概説』」『東洋史研究』第11巻第１号、66-69ページ。

27）砺波（1993）「東洋史学と世界史学」、板垣雄三編『地域からの世界史（世界史の構想21）』朝日新聞社、44ページ。

28）『全集２東洋史』「自跋」、353ページ。

29）『全集18アジア史』、17ページ

30）礪波（1987）「解説」前掲書、507ページ。

31）『全集18アジア史』、193-194ページ。ただしイラン高原のペルシャ人だけは例外である。同、209ページ。

32）この点でもやはり宮崎は、歴史社会学者としての一面を持っているといえよう。彼のいう分析概念としてのナショナリズムは、社会学者である高田保馬が同時期に提唱していた「広民族主義」とも通底するものがある。さしあたり吉野浩司「昭和初期の東アジア共同体の構想―高田保馬の非対称性の民族論」『ソシオロジ』（社会学研究会）第50巻第３号、21-37ページを参照。

33）『全集18アジア史』、229ページ。

34）同、229-230ページ。

35）同、190ページ。

36）同、45-47ページ

37）同、12、47ページ

38）同、12、192ページ

39）同、191ページ。

40）日本において、世界史を東洋と西洋に分けて、中等教育のなかに組み込むという動きが見られたのは、19世紀後半のこと。1984年、文部省が「東洋史」を正規の科目として定め、それにしたがって教科書も作られた。宮崎の東洋概念は桑原隲蔵ゆずりのものであった。桑原隲蔵全集に収録された『中等東洋史』に寄せた解説において宮崎は、東洋史というのは、アジア全土というよりも、中国を中心とする東アジア史であったと記している。宮崎市定（1968）「解説」『桑原隲蔵全集四巻』岩波書店、755-756ページ、『全集24随筆（下）』、546-567ページに所収。

そのためシルクロードとの関連で中央アジアに言及されることが多いのに比して、西アジアや南アジアは比較的軽視されていたという指摘もある。礪波（1987）「解説」前掲書、508ページ。

41）宮崎（1968）「解説」『桑原隲蔵全集四巻』、764ページ。

42）『全集８唐』、327ページ。

43）礪波（1988）「解説」『大唐帝国』中央公論社、440-441ページ。

44）宮崎の代表的な中国中世史研究を、以下に列記しておく。『九品官人法の研究』「唐代賦役制度新考」「隋代史雑考」「日本の官位令と唐の官品令」（以上1959）、「中国における村制の成立」「トルファン発見田土文書の性質について」（以上1960）、「漢代の里制と唐代の坊制」（1962）、「六朝隋唐の社会」（1964）、「中国官制の発達」『隋の煬帝』（以上1965）など。

45）内藤湖南の時代区分が活字となったのは、「概括的唐宋時代観」（1922）（『歴史と地理』第９巻第５号）が最初であった。内藤湖南（1969）『内藤湖南全集第八巻』筑摩書房、111-119ページ。内藤は「唐代は中世の終末に属し、而して宋代は近世の発端」であると明言している。「従来の歴史家は多く朝代によりて時代を区画したから、唐宋とか元明清とか一の成語になって居るが、学術的にはかかる区画法を改める必要がある」。「中世・近世の一大転換の時期が、唐宋の間にある事は、歴史を読むものの尤も注意すべき所である」。同、111、119ページ。ただし講義録である内藤湖南（1947）『中国近世史』弘文堂、第１章「近世史の意義」は、ほぼこの論文の内容と合致している（『内藤湖南全集第十巻』所収）。したがって口述の発表としては、それよりもさかのぼる。おそらく1918年から翌年にかけての講義であろうと推定されている。『内藤湖南全集第十巻』、530ページ。こうした区分方法は、内田銀蔵（1872年～1919年）の『日本近世史』を参考にした。内田（1975）『近世の日本・日本近世史』、平凡社。時代ごとに過渡期を設定していることなどに、内田が内藤に与

えた影響を看取することができるだろう。これを宮崎の区分論と比べてみると、過渡期が消滅しているところに違いが見受けられる。礪波（2002）前掲書、23-24ページ。

46）『全集８唐』、13ページ。

47）同、15ページ。

48）同、426-427ページ。

49）中世史に関するこうした主張は、かつての素朴主義と文明主義の対立図式による説明とは、大きく異なっている。したがってここで、『東洋に於ける素朴主義の民族と文明主義の社会』における中世史について、かいつまんでおいたほうがいいかもしれない。「漢末以来文明化して堕落し来った中原社会が、北族の侵入によりて更生し、唐に至って面目を一新せる社会が現出した」。あるいは「素朴主義の民族を基調とせる唐帝国の雄飛は東洋史上における空前の偉観であったが、その都長安が尨大なる領土の政治、経済の中心となり、東南の財が運河によって運ばれて此処で消費されることになると、浮華文明の風が浸潤して来た」。『全集２東洋史』、85ページ。このように素朴主義にはじまった唐が、次第に文明に慣れ親しむようになるにつれて衰退していくという見方しか、そこには書かれていなかった。

50）礪波（2002）前掲書、15ページ。

51）景気変動史観については、この吉川幸次郎『宋詩概説』への書評（『全集24随筆（下）』）をふりだしに、「六朝隋唐の社会」（『全集７六朝』）、『大唐帝国』（全集８唐）、『中国史』（『全集１中国史』）、「景気と人生」（『全集23随筆（上）』）、ならびに『全集１中国史』の「自跋」などでも詳しく語られている。

52）宮崎市定（1963）「批評・紹介　吉川幸次郎『宋詩概説』」『全集24随筆（下）』、444-453ページ。

53）同、446、447、451ページ。

54）『全集８唐』、330ページ。

55）注21を参照。

56）主として京都大学の東洋史学と、東京大学の中国史学という構図で交わされたのが、時代区分論争である。これについては増淵龍夫（1960）「日本における東洋社会経済史学の発達（上）」『社会経済史大系Ⅹ日本における社会経済史学の発展』弘文堂を参照。また鈴木俊・西嶋定生共編（1957）『中国史の時代区分』東京大学出版会、209-218ページには、論争関連の文献目録がある。

57）図表１と比較しても分かるとおり、この略年表には、幾つかのバリエーションがある。例えば表を横置きにしたり、表の下部を古代にしたりしているものなど。最新版の図表３では近代（最近世）が加えられているのが特徴である。

58）『全集１中国史』、19-20ページ。宮崎は、1911年の中華民国の成立をもって、最近世のはじまりとした。なお当初は、アヘン戦争をもって最近世の起源を求める立場をとっていたが、最終的には皇帝制度が廃止される辛亥革命、すなわち中華民国の成立のほうを選びとっている。前掲書、75ページ。なお時代区分を四つに分割するという考え方の元となったのは、桑原隲蔵『中等東洋史』や那珂通世『那珂東洋小史』などの意見である。西洋史の区分を「丸呑み」するのではなく、「自然に落ち着く結論」を探すと、四区分になる。そうしたことからか、近年（1977年）では西洋史でも四区分になったと宮崎は述べている。同、37ページ。

59）同、72ページ。

60）同、19ページ。

61）同、14、23-25, 17ページ。〔亀甲内〕は引用者による補足。以下同様。

62）同、12-15ページ。

63）同、38、44、46ページ。

64）同、48-49ページ。こうして「古代に盛んになりかけた貨幣経済の衰頽」とともに、「自然物経済の再興」が目指されるようになる。「比較的自由になりかけた人間関係」は、「貴賤の階級」へと固定化される。こうして身分社会は出現するのである。同、49-50ページ。

65）同、62-64ページ。これと関連して、「中国が外貨を獲得するための独占的商品は、従来は絹に限られた観があったが、やがて茶がこれに加わった。さらに第三の輸出品として、陶器があらわれた」という指摘も重要である。『全集８唐』327ページ。

66）『全集１中国史』、67-68ページ。

67）Lee, J. S. 1931. The periodic recurrence of internecine wars in China. *The China Journal* (March-April) 111-163.

68）同、69ページ。

参考文献

荒木敏一（1948）「書評」『人文科学』（京都帝国大学）２巻２号。

佐口透（1950）「〈批評・紹介〉宮崎市定著『アジヤ史概説』」『東洋史研究』第11巻第１号、66-69ページ。

白鳥庫吉（1934）「満鮮史研究の三十年」『白鳥庫吉全集第10巻』岩波書店。

————（1939）「東西交渉史上より観たる遊牧民族」『白鳥庫吉全集第８巻』岩波書店。

鈴木俊・西嶋定生共編（1957）『中国史の時代区分』東京大学出版会。

内藤湖南（1922）「概括的唐宋時代観」『内藤湖南全集第八巻』筑摩書房、111～119ページ。

————（1947）『中国近世史』弘文堂、『内藤湖南全集第十巻』筑摩書房。

成瀬治（1977）『世界史の意識と理論』岩波書店。
長谷川亮一（2008）『「皇国史観」という問題―十五年戦争期における文部省の修史事業と思想統制政策』白澤社。
礪波護（1987）「解説」『アジア史概説』中央公論社。
――――（1988）「解説」『大唐帝国』中央公論社。
――――（1993）「東洋史学と世界史学」、板垣雄三編『地域からの世界史（世界史の構想21）』朝日新聞社。
――――（2002）「アジア史家の宮崎市定」、宮崎市定『アジア史論』中央公論新社所収。
――――、藤井譲治編（2002）『京大東洋学の百年』京都大学学術出版会。
増淵龍夫（1960）「日本における東洋社会経済史学の発達（上）」『社会経済史大系Ⅹ日本における社会経済史学の発展』弘文堂。
松本善海（1949）「中国社会史の新たなる課題」『史学雑誌』第58巻第３号、86-96ページ。
宮崎市定（1940）『東洋における素朴主義の民族と文明主義の社會』冨山房、『全集２東洋史』。
――――（1947-1948）『アジヤ史概説』（正編・続編）人文書林、『全集18アジア史』。
――――（1955）「中国古代史概論」『全集３古代』、３-34ページ。
――――（1957-1964）『アジア史研究』（全５巻）同朋舎。
――――（1957）「『アジア史研究』第一　はしがき」『全集24随筆（下）』、486-491ページ。
――――（1963）「批評・紹介　吉川幸次郎『宋詩概説』」『全集24随筆（下）』、444-453ページ。
――――（1968）「解説」『桑原隲蔵全集四巻』岩波書店、755-756ページ、『全集24随筆（下）』、546-567ページ。
――――（1971）「安倍健夫君遺著の序その一」『全集24随筆（下）』、578-582ページ。
――――（1959）「『アジア史研究』第二　はしがき」『全集24随筆（下）』、494-498ページ。
――――（1976）『宮崎市定アジア史論考』（全３巻）朝日新聞社。
――――（1988）『大唐帝国―中国の中世』中央公論社、『全集８唐』。
――――（1991-1994）『宮崎市定全集』（全24巻・別巻１冊）岩波書店。
――――（1977）『中国史』岩波書店、『全集１中国史』。
――――（1996）『自跋集―東洋史学七十年』岩波書店。
吉野浩司（2006）「昭和初期の東アジア共同体の構想―高田保馬の非対称性の民族論」『ソシオロジ』（社会学研究会）第50巻第３号、21-37ページ。
――――（2009）『意識と存在の社会学―P.A.ソローキンの統合主義の思想』昭和堂。
Lee, J.S. 1931. ‘The periodic recurrence of internecine wars in China.’ *The China Journal* (March-April) 111-163.
McNeill, William Hardy (1999) *A World History* 4th ed., Oxford University Press, 増田義郎、佐々木昭夫訳（2008）『世界史』（上・下）中央公論新社。
Sorokin, Pitirim A. (1985) *Social and Cultural Dynamics : A Study of Change in Major Systems of Art, Truth, Ethics, Law, and Social Relationships,* Transaction Books.